

平成二十一年度

大洲市地域福祉(ボランティア)研修会

平成二十二年二月七日(日) 大洲市総合福祉センター

二月七日(日)、大洲市総合福祉センターにおいて、『認知症を知る』をテーマとして大洲市地域福祉(ボランティア)研修会を開催しました。当日は市内を中心に約二百七十名の参加をいただきました。



近藤 誠 先生

開会行事と、今年度大洲市社会福祉協議会が実施した愛媛県地域福祉等推進特別支援事業の報告の後、西条市高齢介護課包括支援係長、認知症サポーター百万人キャラバン作業部委員会委員 近藤誠先生を講師に

「認知症を知り地域で支えよう」と題した講演が行われました。高齢者福祉やまちづくりの現場での多様な経験と、ご自身のお父様が認知症になられてご家族と一緒に在宅で介護をされたという経験をお持ちの近藤先生は、認知症の医学的な説明と家族や地域の関わり方について、終始認知症の方やその介護者への温かな視線を基に次のお話されました。

認知症高齢者は、介護保険の調査で把握されているだけでも年々増加の一途を辿っており、将来私たちの内、いつ誰が認知症になってもおかしくない状況です。そんな現実を知ってもなお、「認知症」と聞いて、自分になりたいかと尋ねられると誰しも「なしたくない」と答えることでしょう。私たちが目指すべきは、たとえ自分が認知症になっても安心して暮らせる社会をつくるということなのです。



まず、認知症を正しく知ること。それにより、認知症の方の症状や行動の理由が理解でき、対応の大きな助けになります。また、この対応で一番大事なことは、認知症の方の「心地よさ」すなわち「快」の気持ちを守ってあげる介護をすることです。認知症になると、本人はもう何も分からない、感じないというのは間違いです。その時々「快・不快」の感情はいつまでも残り、本人の心や症状に影響し続けます。とかく介護は介護者の都合で行う場合が多いですが、大切なのは本人の気持ちである、ということをお忘れではありません。

しかし、本人の気持ちばかりを中心に介護を続けると、介護者自身も参ってしまいます。「良い介護」とは、確かに技術的なことも大事ですが、一番良い介護とは、看ている方が心も体も健康であり続けることです。認知症のケアは、いつ終わりが来るということはありません。そのためにも、介護保険も地域のサービスも上

手に使いながら、自分の息抜きやリフレッシュする時間を大切にしてください。自分を大切にして健康であり続けることも大切な「介護」なのです。

そして、認知症の方とその介護者にとつて地域の皆さんの声掛けやさり気ない気遣いがどれほど支えになるかということを是非分かってください。「手放しのネットワーク」と呼んでいますが、「当たり前」に優しい「ある社会」をつくるのが、冒頭の、「たとえ自分が認知症になっても安心して暮らせる社会」をつくることになるのです。

参加者の皆さんは、近藤先生のユーモラスな話術に引き込まれ時に大笑いしながらも、認知症に対する認識を新たにし、認知症の方のご近所さんとして、家族として、どのような気持ちで接し、当たり前前に優しいある社会にするためにはどうすればよいか、具体的ですぐに実行できるお話の数々に大きくうなずいておられました。

